

き どう にちえつしょうにん はか かんれんひん 喜道(日悦上人)の墓及び関連品

分類：有形文化財

町指定文化財：平成 28 年 2 月 25 日指定

上中地区

町指定文化財

喜道(日悦上人)の墓及び関連品

喜道(日悦上人)の墓は河内神社境内にあります。日悦は 10 代島主幡時の弟で、出家して喜道と名のり、大会寺(西之表天神町の菅原神社附近にあった)の住職となりました。幡時の死後、後継者がいなかったため、喜道は幡時の子連れてきて、11 代島主(時氏)としました。時氏は、日典と日良の勧めにより律宗を捨て、法華宗を信仰し、応仁 3 年(1496)、改宗の命を出しました。喜道は熱心な律宗信者であったため改宗に反対し、赤尾木を離れ河内に隠居し、加治谷峯に極楽寺を建て、河野家にしばらく身を寄せました。

極楽寺に移ると、喜道の徳を慕って村人たちが弟子入りを希望しましたが、律宗の僧侶としては自分が最後だと、全て断ったといいます。喜道は、余生を河内の人々のために尽くすことに努めました。村を豊かにするために、不毛の土地に水を引き、美田を 1 町 8 反(約 178a)も開墾しました。また、郡川両岸にはキンチク竹(ホウライチク)を植え、川の氾濫を防ぎ、更に孟宗竹も植え、それを利用した竹細工の指導も行いました。その場所は、今でも細工の宇都と呼ばれています。その後、島主からの圧迫が厳しくなったため、河内の人々に迷惑がかかることを恐れて、この地を去りました。



日悦上人の墓

去るにあたり、お世話になった河野家に立ち寄りましたが留守だったため、障子に「尋ねともあとは白波荒磯の見る目もあらで何とあらそう」という辞世の句を書き残し、さらに法衣を置いて去りました。それは、延徳2年（1490）9月11日のことであったといえます。喜道は最後まで改宗しませんでした。島主の叔父であったことから「自悦坊日悦」という法華宗の僧名を贈られ、極楽寺境内に墓が建てられました。極楽寺は明治2年の廃仏毀釈で廃寺となり、その跡に日悦上人を祭神とする河内神社（現在の上中神社）が建てられました。

喜道が消息を絶った旧暦9月11日を命日とし、現在も祭が行われています。祭は前日の9月10日に信光寺の僧侶が経をあげ、つぎに神主が祝詞をあげます。翌朝、まず日悦の墓に、次の神社に向かって大踊りをします。逆の順序で踊ると、神社の横から大蛇が出てくると伝えられています。

喜道が残した法衣は河野長平氏宅に今でも大切に保管されていますが、辞世の句を書いた障子は戦争中に紛失したそうです。

大正11年1月上中青年会は、日悦上人の遺徳を顕彰し、石碑を上中神社境内に建立しました。



日悦上人の法衣

＊種子島家譜に見る日悦の記録

- 長享元年（1487）「・・・時氏、喜道・円林の改宗を欲して、之を両本山に請ひしなり」
- 長享2年6月13日「・・・大会寺喜道愼を含んで見えず（時氏立つや喜道の力なり、而して喜道謂へらく『吾固より釈門の徒たり、宗旨を改め、日増を迎ふる、宣しく我に謀るべし、今や然らず、吾何ぞ見ん』）」
- 延徳2年9月11日「大会寺喜道、中之村河内に卒す、ついに宗旨を改めず強いて自悦坊日悦と諡し、改宗の祖と為す」